

『唯我独尊な男 番外編』

著：あすか

ill：タカツキノボル

もし、不治の病がジャックの命を奪ったら。

この抱擁を失ったら……。

ジャックが姿を消したら……。

俺、どうなるんだろう。

「珍しいな……甘えているのか？ ん？」

「今、少しだけでいいから……こうしていてくれよ……」

性急に身体を貪られたくはない。

この、緩やかな抱擁に今しばらく浸り、ジャックの匂いや、温もりを味わいたいのだ。こんなふうにするのは、恭夜自身、とても珍しいことだった。

「ああ、いいとも……」

ジャックはあっさりと言いきり、恭夜の身体を愛撫することなく、ただ、抱きしめてくれた。恭夜は目を細め、ジャックの温もりに酔い、この腕の中に囚われている幸運を、心から感謝していた。

「ジャック……」

ギュッとしがみつき、恭夜は『好きだ』という気持ちを込めて、ジャックの名を呼んだ。

「本当に、今日はいつにもまして、愛らしいな」

ジャックは恭夜をそっと離し、軽く唇にキスを落とす。触れるようなキスだったが、恭夜は身体の奥から熱いものが込み上げてきて、ジャックの愛撫に焦れた。

「あ……」

瑞々しい唇は胸から腹へと一気に滑り下り、すぐさま股間へと向かう。すでに露わになっている恭夜の雄をジャックは啜る。生温かくて湿った舌が雄に絡まり、クチュクチュと吸い上げた。

「……ジャック……ッ！」

恭夜は顔を手で隠し、羞恥に耐えた。

いまだに恭夜は雄をしゃぶられる行為に慣れないのだ。

けれど、ジャックは恭夜の雄に食らいついたまま、美味そうに味わっていた。

「……あっ、あっ……あ……」

ジャックの口内で体積を増す雄の表面に、歯が時折触れる。痛みはなく、皮を引っ掻くようなジャックの歯に、心地よさすら感じるのだ。

「あ……ジャック……」

ジャックは恭夜の太ももを押し、思いきり両脚を左右に広げている。太ももに食い込むジャックの指先も、恭夜には気持ちのいい刺激だった。

「……んっ……あ……」

次第に激しくなる口の動きに、恭夜は思わず腰を振りそうになるのを堪え、床に爪を立てて引っ掻い

ていた。

「……出るっ……も、駄目だ……」

恭夜は眉間に皺を寄せ、自分の顔や頭を無意識に撫で上げて、訴えた。けれどジャックの唇は恭夜の雄から離れず、さらに快感を煽るように擦り上げられる。

「あっ、あっ……あ……あ———っ！」

先端の割れ目を甘噛みされて、恭夜は思わず欲望を迸らせた。白濁した蜜はジャックの口内に溢れていく感触が伝わってくる。同時に、ジャックは恭夜の雄を吸い上げ、ビュクビュクと断続的に吐き出される蜜を嚥下し、雄に残された蜜の残りをも、一滴残らず飲み干した。

「……あっ……はあ……は……はあ……」

引き絞られた弓が緩むように、一気に力が抜けた恭夜は、身体を弛緩させたまま、荒い息を吐き出していた。だが、ジャックはすでに蜜は空っぽになっているのに、恭夜の雄を啜えたまま、舌で弄んでいる。

「しつこいって……も、やめろよ……」

すでに力を失った雄を、引っ張り上げるようによろしく吸われると、身体の奥がどうしようもないほど疼き、羞恥などかなぐり捨てて、ジャックを求めそうになるのだ。

「ジャック……だから……放せ……っ！」

両手でジャックの頭を掴むと、ようやく顔を上げた。

「なんだ？」

「そこばかり……やめろって……」

恭夜が腰を引こうとしたが、ジャックは許さなかった。

「私にとって、ここはとても可愛いところだからな。しつこくもなるさ」

太ももの付け根を軽く噛んで、吸い付いてくる。

小さな痛みを伴う愛撫の数だけ、キスマークとして刻まれていくのだろう。恭夜の身体には、ジャックの所有の印が隙間なく刻まれている。これ以上、必要ないだろうと恭夜は思うのだが、ジャックは違うようだ。

「あっ……も……ひっ！」

広げられていた両脚が、膝が胸に付くほど思いきり曲げられ、秘所を露わにされる。恭夜は顔を赤らめ、膝を押さえつけているジャックに訴えるような目を向けた。

「どうした？」

「……は……恥ずかしい……んだけど……」

そろそろと股間に手を伸ばし、恭夜が隠そうとすると、ジャックの手がそれを払った。

「ジャック……」

「手で隠されたら、ここを可愛がってやれないだろう？」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>